

外国人技能実習生の日本語学習と使用に関する実態調査 —地方の食品製造工場を事例に—

野原 ゆかり

Survey on Japanese Language Learning and Use by Foreign Technical Intern Trainees: A Case Study of Local Factories of Food Manufacturers

NOHARA Yukari

Thirty years after the Industrial Training and Technical Internship Program was implemented, there is still much debate surrounding this program. Language barriers are often a factor in the problems faced by intern trainees, and thus people have pointed out the importance of Japanese language education. Therefore, this study will clarify the status of Japanese language learning and operation among Foreign Technical Intern Trainees to examine issues for continuous learning support. The survey was conducted from July to September 2019 on 86 Foreign Technical Intern Trainees working at local factories of two food manufacturers. The survey method consisted of a questionnaire in the target population's native language, and responses were obtained mainly through free-answer questions on items related to Japanese language learning and operation. We attempted to classify the responses through qualitative analysis. The results of the analysis showed that most of the trainees are continuing their studies, but many responded "alone," "with a senior at work," or "with an instructor," suggesting that they are not making much use of the support from the local community. In addition, communication difficulties revealed not only Japanese language skills, but also issues on the part of the Japanese people around them.

1. はじめに

外国人技能実習制度は、1993年に在留資格「特定活動」の中に設けられたことに始まる。1997年の改正を経て2009年から「技能実習」という単独の資格ができた(古川 2021)。制定から30年が経とうとする今、この制度をめぐる議論が絶えない。令和4年12月現在、制度見直しに向けて第1回目の有識者会議が開催されたところである(出入国在留管理庁 2022)。厚生労働省の統計によれば、2011年に約13万人であった技能実習生の数は、2020年には約40万人となっている。コロナ禍で2021年には35万人に減少に転じたものの、外国人労働者数の2割を占めている(厚生労働省 2022)。技能実習生が直面する問題には言語の壁が要因となる場合も多く、日本語教育の重要性が指摘されている。日本語能力については、現行の制度では介護職種を除いて入国時に日本語要件が設けられていない。また、学歴についても要件はない。実習前に原則2か月間の講習が義務付けられ、その期間に日本語や生活習慣等について学ぶが、実習開始後の日本語教育は受入れの企業や監理団体に任されているのが現状である(法務省・厚生労働省 2022)。したがって、その実態は把握し難く問題が表面化されにくい。そこで本研究では、外国人技能実習生への継続的学習支援のための課題を検討することを目的として、日本語学習と使用の実態を明らかにする。

2. 先行研究

外国人技能実習生(以下、技能実習生)の日本語学習に関する研究は、飯田(2021)で述べられているように、現在もいまだ少ない。そのなかで、中川・神谷(2017, 2018)は学習環境や学習意識等に注目し、技能実習生と受け入れ関係者への聞き取り調査を行っている。中川・神谷(2017)では、学習環境をめぐる課題として、実習生と同じ母語を話す日本語指導員や相談員の存在が重要であると述べている。また、中川・神谷(2018)では、日本語学習意識に影響を与える要因として、「来日目的と日本語学習意識」、「日本語学習環境の確保」、「事業主、日本人スタッフとの信頼関係」、「地域社会、職場環境への適応」、「日本語学習上の困難点-技能実習生の立場から」の5つのグループカテゴリーを提示している。

道上(2021)、飯田(2021)の研究は、就労現場での技能実習生と日本語母語話者とのやりとりを分析したものである。道上(2021)では、日本人指導員は技能実習生の発話困難に対する「察し」や、理解の確認を行うなどの配慮を行っていること、技能実習生の言語形式上不完全な発話はコミュニケーション

を阻害する要因にはなっていないことなどを明らかにしている。また、飯田(2021)は農業現場での継続調査により、両者の円滑なコミュニケーションにはリーダー的な役割をもつ技能実習生の存在が重要であることを示唆している。

さらに、技能実習生のキャリア形成に注目した研究も行われている。見館ら(2022)は技能実習生へのインタビューから、キャリア形成を阻害する要因のひとつとして、「日本語を学ぶ機会の喪失」を挙げている。

以上の先行研究は少数のデータを分析対象としたものがほとんどである。これらの研究から得られた知見を踏まえ、技能実習生の日本語学習や使用の実態についてさらにデータを増やした研究が必要であると考ええる。

3. 研究の目的と課題

本研究では、外国人技能実習生の日本語学習と使用の現状を明らかにするため、以下の2つの研究課題（以下RQ）を設定する。なお、先行研究ではほとんど採用されていない質問紙調査で実態を見ていく。

RQ1：どのように日本語学習が継続されているか。

RQ2：日本語使用で何を困難と感じ、どのように対処しているか。

4. 研究方法

4.1 調査対象者

調査の対象としたのは食品メーカーのA社とB社で、それぞれ地方の工場で働くミャンマー人技能実習生86名（A社34名、B社52名）である。A社は兵庫県および埼玉県、B社は徳島県の工場に協力を得た。年齢は19歳から37歳で平均値、中央値とも26歳である。また、女性が77名で全体の9割を占めている。技能実習の年数については、1年目が17名、2年目が33名、3年目が36名となっている。なお、1年目は技能実習1号、2年目および3年目は技能実習2号の資格で働いている。

対象者の言語については、以下の図1および図2に示す通りである。第一言語は、約9割がミャンマー語で、第一言語以外で理解可能な言語は、約6割が日本語（「少し」も含む）で、続いて英語、マレー語、中国語、タイ語となっている。

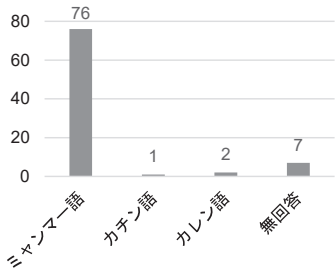


図1 第一言語

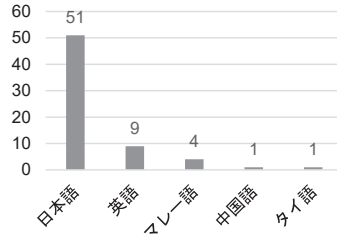


図2 理解可能な言語

対象者86名のうち日本語能力試験（以下 JLPT）受験合格者は27名（1年目5名、2年目6名、3年目16名）で、全体の約3割にあたる。実習年数別に見た合格レベルの人数を図3に示す。1年目ではN4が4名、N5が1名であった。また、2年目ではN4が5名、N2が1名で、3年目ではN4が10名、N3が4名、N2が2名であった。

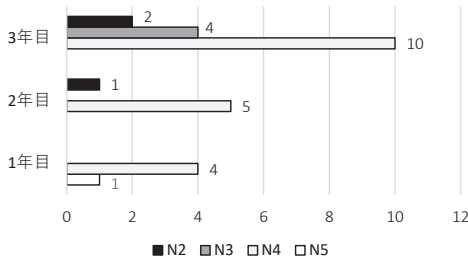


図3 実習年数別 JLPT 受験合格レベル

4.2 調査期間と手続き

調査は、質問紙を用いて2019年7月から8月にかけて実施した。質問項目は主に自由記述式で構成し、全17問とした。質問紙は日本語版とミャンマー語版を作成して各企業の担当者に送付し、技能実習生にはミャンマー語版を配布してもらった。回答はミャンマー語か日本語の選択とした。

4.3 分析方法

RQ1では学習頻度、学習理由、学習環境に関わる項目への回答を分析対象と

した。RQ2では日本語の使用における困難とその対処に関わる項目への回答を分析対象とした。なお、困難と対処については発話時に限定している。日本語版の質問項目は以下の通りである。Q11からQ13がRQ1、Q14およびQ15がRQ2に対応する。

- Q11. 現在の日本語学習について {毎日・時々・していない}
- Q12. どうして日本語を勉強していますか／していませんか
- Q13. 日本語の勉強をしていると答えた人は、次の質問に教えてください。
 ①誰と勉強していますか ②どこで、どのように勉強していますか
- Q14. 日本語理解について
 ①日本語がわからなくて困るのはどんな時ですか
 ②日本語がわからないとき、どう解決していますか
- Q15. 日本語使用について
 ①いつ日本語を使いますか 話す： 書く：
 ②日本語でうまく言えないとき、どう解決していますか

回答の分析は、RQ1では主に単純集計を、RQ2では自由記述について定性分析を行った。定性分析の手続きは佐藤（2008）を参考にした。

5. 結果と考察

5.1でRQ1の日本語学習を、5.2ではRQ2の日本語使用について分析の結果を見ていく。

5.1 どのように日本語学習が継続されているか

5.1.1 学習頻度

現在の学習については、86名中85名の回答を得た。実習年数別の学習頻度の結果を図4に示す。まず、すべての実習年数において「時々」が最も多く、全体でも67名と、8割を占めた。次に「毎日」と回答したのは、2年目では33名中14名、3年目では、35名中5名であった。実習年数に関わらず、9割以上の人が学習を継続していることがわかる。一方で、4名が「していない」と回答し、わずかではあるが各実習年数に見られた。

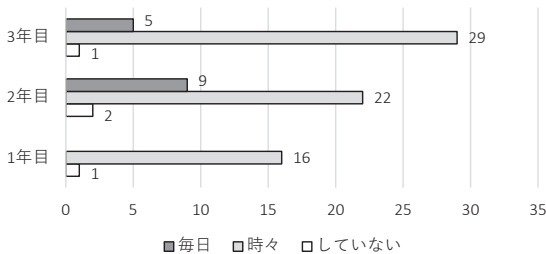


図4 実習年数別学習頻度

5.1.2 学習理由

学習を継続している81名について自由記述による回答を分析した結果、「言葉・文化への関心」、「仕事・生活での必要性」、「仕事・生活の向上」、「人生・キャリア」の4つの理由に分類ができた(表1)。まず、「言葉・文化への関心」は、日本語や日本文化、日本人への興味関心といった個人の内発的なものである。「仕事・生活での必要性」は、職場や生活で役に立つため、何か起こったときに困らないようにするためといった、現在日本で生活し、仕事をするなかでの必要性が窺えるものである。また、「仕事・生活の向上」は、日本人と肩を並べて働きたいといった仕事での立場や、生活の質をよりよくしたいというものである。さらに、「人生・キャリア」は帰国後やこれから先の仕事を見据えているものである。

一方で、学習をしていない理由については、仕事がない日はゆっくりしたい、日本で働いているため、日本語に興味がないというものであった。ここで注目したいのは「日本で働いているため」という理由が中断した人にも見られたことである。学習継続者の場合は日本語の必要性が学習動機になっているが、中断した人では日々の労働が学習動機につながらない、あるいは動機を下げている可能性があると考えられる。

表1 学習継続の理由

カテゴリー	回答の記述例
言葉、文化への関心	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語を学習するにつれさらに好きになってきたから ・日本のアニメが大好きだから ・日本人・日本国の考えや制度などを知るため
仕事、生活での必要性	<ul style="list-style-type: none"> ・職場で役に立つため、日本で働いているから ・生活で役に立つため、日本で生活しているから ・日本人とコミュニケーションがうまく取れるようにするため ・何か起こったときに困らないようにするため
仕事、生活の向上	<ul style="list-style-type: none"> ・日本人と肩を並べて働きたいから ・日本で生活の生活をより良くするため
キャリア形成	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語はレベルが高いことから、よりよい人生を送るため ・ミャンマーに帰ってから日本と関わりのある仕事をしたいから ・これから先、日本と関わる仕事を続けていきたいから

5.1.3 学習環境

学習環境について、誰と学習しているかとの質問には82名から回答を得た。「ひとりで」が半数を占め、「同じ出身国の従業員」が20.7%、「学校等の日本語クラスで先生と」が12.6%、生活指導係等の「日本人従業員」および「友だち」がそれぞれ8%であった（図5）。なお、82名の回答のうち5名に複合的な内容が見られ、それぞれの分類に含めた。

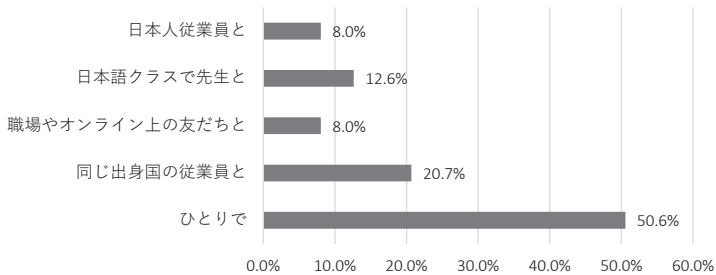


図5 誰と学習するか

学習場所と方法については、83名から回答を得た。場所は自宅・寮が56.6%と最も多く、次いで職場が31.3%、学校等の日本語クラスが12.0%であった。学習方法は多様であるが、試験のための学習がやや目立つ。また、インターネットやオンラインという言葉も多く見られた。回答例を表2に示す。

表2 学習方法・内容

回答の記述例
<ul style="list-style-type: none"> ・わからない語句を辞書で調べる ・文法、意味、漢字、リスニング ・試験の過去の問題集を解く ・問題集や翻訳書を使う ・本を読む ・日本のドラマを見る ・オンラインで動画を見る ・ネットやオンラインで、そこに出てくる日本語の語句を覚える

5.2 日本語の使用で何を困難と感じ、どのように対処しているか

5.2.1 使用場面

日本語を話す場面では、仕事中、職場、買い物、旅行が挙げられた。一方で、「工場の中では誰も話さない。話したいけれども。」という回答も見られた。また、日本語を書く場面では、職場からの連絡時、友だちと話す時、日本語学習、住所を書く時、手紙を書く時、試験の時が挙げられた。但し、話すことについては回答率が約5割、書くことについてはさらに少なく約2割であった。ほとんどの対象者が学習を継続していると答えたにもかかわらず、運用についての回答が低かったことから、生活の中で日本語を使用する機会が限られている可能性が考えられる。

5.2.2 困難

日本語がわからなくて困る時についての質問では82名から回答を得た。回答から具体的な場所等の場面を抽出し図6に示す。働く場面が多く、外出時では病院が目立った。警察とあるのは、交通事故で警察に事情を説明する場面である。また、一方で回答者の約1割にあたる10名が困ることはないと回答した。

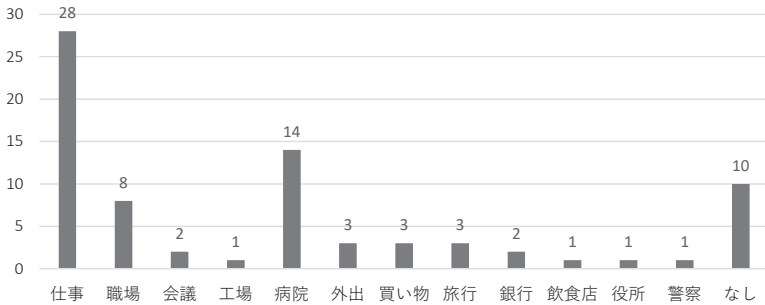


図6 日本語がわからなくて困る場面

回答の記述例を表3に示す。仕事上では、早口や小さい声で話されるといった日本人側の話し方によるものと技能実習生側の語彙量や口頭説明の能力の不足によるものが見られた。また、外出時では複雑な説明での状況で困難に感じていることが窺える。さらに、特定の場面や場所の明記がないため、広く日常と捉えられるものからは、正当性を主張したり、反論したりといった論理的な説明が求められる状況で困難を感じていることがわかる。

表3 日本語がわからなくて困る場面、状況の回答例

場面・状況	回答の記述例
仕事	<ul style="list-style-type: none"> ・ 作事中、予定を早口で言われたり小さな声で言われたりする時 ・ 作事中に日本人の話す言葉がよくわからず失敗した ・ 作事のことを説明する時 ・ 作事中に機械の名前を言う時 ・ 会議の場で話される語句がほぼわからない
外出時	<ul style="list-style-type: none"> ・ 具合が悪くなって病院に行く時 ・ 買い物に行って自分が欲しいものが見つからない時 ・ 交通事故で警察に行って事情を説明しなければならない時
日常	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分は正しいが、それを言い返せない時 ・ 自分は何もしていないのに責められた時

5.2.3 困難な場面や状況での対処

日本語がわからない時にどのように解決しているかという質問では、82名から回答を得た。これらの回答内容について分析を行った結果、「第三者に支援要請」、「相手に支援要請」、「自分で解決」の3つの方略に分類ができた。結果

を表4に示す。まず、「第三者に支援要請」では、通訳や同じ国出身の同僚などに聞くといった、両言語のわかる第三者に支援を要請する方略である。また、「相手に支援要請」は、相手に直接わからないということを伝えたり、言語調整をお願いしたりする方略である。さらに、「自分で解決」は、言い換えたり、説明を繰り返したりして、他者に頼らず解決を試みようとする方略である。

表4 解決の方略

カテゴリー	回答の記述例
第三者に支援要請	<ul style="list-style-type: none"> ・通訳の助けを借りる ・友だち／先輩／同じ国出身の従業員に聞く ・他の人に聞く
相手に支援要請	<ul style="list-style-type: none"> ・相手（日本人）に「わかりません」と言うと、よりわかりやすい単語で説明してくれる ・相手（日本人）にわかりやすい単語でゆっくり話してくれるようお願いする
自分で解決	<ul style="list-style-type: none"> ・他の単語に言い換える ・相手がわかるまで説明する ・わかる範囲のみ解決する ・ジェスチャー、ボディランゲージを使う ・スマホで調べる

また、日本語でうまく言えないときの解決法の回答についても、分析の結果同様のカテゴリーとなった。

6. 総合的考察

本章では技能実習生への継続的学習支援のための課題に焦点をあて、総合的考察を行う。

学習状況の結果からは、ほとんどの対象者が学習を継続していることがわかった。学校等の日本語クラスでの学習が少ない背景には、工場の立地も関係している。日本語学校もボランティアの日本語教室も市街地にある場合が多く、今回対象とした地域の日本語教室も工場や寮からは遠いため、電車やバスを利用することになるが、その本数も少ない。交通費や時間を考えると技能実習生にとって負担は少なくないだろう。多くの技能実習生がインターネットを利用してひとりで学習している現状を考えると、国や地域の日本語学習支援が、今以上にオンラインで提供されることが期待される。そこで重要なのは、学習者

自身が簡単にコンテンツにアクセスできることである。また、職場で同じ国出身の従業員が学習のパートナーとして大きな役割を果たしていることが窺える。この点については、中川・神谷（2017）でも同様に存在の重要性が述べられている。

日本語でのやりとりの際の困難では、職場でも外でも口頭での説明に困難を感じていることがわかる。技能実習3年目でも JLPT の合格レベルは N4 が最も多いということからも、その困難は推測できる。さらに、学習を継続していてもその内容が試験対策中心となっているため、現実のやりとりで必要な能力を養うことにつながっていない可能性もある。何らかの形で日本語教育の専門家による支援が必要であると感じる。さらに、やりとりでの困難には日本人側の話し方によるものがあり、一方で、相手の日本人に言語調整を要請するという技能実習生の解決の方略が見られた。また、学習を日本人従業員と一緒にしているという回答も 1 割程度見られた。これらのことは、日本語学習に日本人が関わることで、技能実習生の日本語の特徴を理解する機会となり、それが現場でのやりとりが円滑に行われる基盤づくりとなる可能性を示唆している。

最後に、技能実習生の中には、キャリア形成のために継続して学習する人もいる。見館ら（2022）が指摘した、日本語学習の機会の喪失がキャリア形成を阻害する要因のひとつであるということを重ねて受けとめなければいけない。

7. おわりに

本研究では、食品製造工場で働く外国人技能実習生を対象に、日本語学習と使用の現状を明らかにし、継続的学習支援のための課題を考察した。対象者のうち 9 割が学習を継続しているという結果は予想外であった。今回の対象者のほとんどが女性であったこと、2 社ともすべてミャンマーからの技能実習生であったことが結果に影響していることも考えられる。さらにデータを追加した研究が必要である。今後の課題として、技能実習生の日本語学習の継続に関して、日本人側の意識を探ることを挙げておきたい。

付記

本研究は、JSPS 科研費19K00715の助成を受けたものです。

参考文献

飯田朋子（2021）「技能実習生と日本語母語話者の協働現場及び日本語コミュニケーション

の実態分析－農業現場の実態に沿う技能実習生日本語教育のために」『日本語教育』180, 33-48

厚生労働省 (2022) 「外国人雇用状況」の届出状況まとめ (令和3年10月末現在)」 https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_23495.html, 2022年12月14日閲覧

佐藤郁也 (2008) 『実践質的データ分析入門』新曜社

出入国在留管理庁 (2022) 「技能実習制度及び特定技能制度の在り方に関する有識者会議 (第1回)」 https://www.moj.go.jp/isa/policies/policies/03_00034.html, 2022年12月20日閲覧

中川かず子・神谷順子 (2017) 「道内外国人技能実習生の日本語学習環境をめぐる課題－受け入れ推進地域を事例として」『開発論集』99, 15-32

中川かず子・神谷順子 (2018) 「北海道におけるベトナム人技能実習生の日本語学習意識と学習環境－多文化共生の視点から考察」『開発論集』102, 79-98

古川飛祐 (2021) 『外国人雇用の労務管理』税務経理協会

法務省・厚生労働省 (2022) 「外国人技能実習制度について 令和4年4月25日改訂版」 <https://www.mhlw.go.jp/content/000932973.pdf>, 2022年12月1日閲覧

見館好隆・河合晋・竹内治彦 (2022) 「技能実習生のキャリア形成モデルの提案－阻害要因の解決を視座にした M-GTA 分析を通して－」『ビジネス実務論集』40, 11-22

道上史絵 (2021) 「技能実習生と日本人指導員間の就労現場でのやり取りにおける「許容性」「寛容性」の実践」『日本語・日本文化研究』31, 51-65